

IJBG ミーティングも、いよいよ閉会の時が迫ってまいりました。昨日のワーキング・グループによるセッションと、本日の本会議とを合わせ、大変有意義な議論が繰り広げられたと思います。

今回は、IJBG メンバーの方々に加え、日本からは、ジェトロや ICE のご協力を賜り、中小企業交流を目的とした多数のミッションの方々のご参加を頂きました。昨年から引き続きご参加頂きました宮城・ピエモンテと、長野・ベネトの各地域クラスターの皆様は、より踏み込んだ議論に進まれました。今回初めてご参加頂いた富山・ファームインダストリアの皆様には、日伊間経済協力の新しい可能性の芽が、今後素晴らしい果実を生むよう、ぜひ対話を進めて頂きたいと思います。

今回は、私自身も、低炭素社会の実現に向けたプレゼンテーションを実施させて頂きました。世界は今後、ますます人口が増え、新興国は豊かな生活を求め、産業が発展し、エネルギー需要は伸びを見せると思います。日本もイタリアも、工業国として、既に豊かな生活を享受しており、CO2 削減が危急の課題とわかってはいても、個々の人々にとっては、その生活レベルは落とすたくない、エネルギーコストも安いほうがよい、というのが本音だと思います。

私の直前の勉強に話を戻しますけれども、カエサルは、その著書「内乱記」の中で、「人間ならば誰にでも、現実の全てが見えるわけではない。多くの人は、見たいと欲する現実しか見ていない」と、今から 2000 年も前に語っています。見たいと欲する現実しか見なかった結果、何が起こるか。私は今回のプレゼンテーションにおいて、この点を強調しなければならないと思っていました。現実をしっかりと見据えて、次に我々は何をすべきか、長期的にどこに到達すべきであるのか。我々はこれから、どういう痛みを世界で分け合うのか、ということ、現実をきちんと見ながら認識し、自覚し、それに耐えていかなければならないと思っております。経営者として、企業人としての身の処し方はどうあるべきか、という意味では、ここにいらっしゃる多くの皆様に当てはまる課題だと思います。

次回の IJBG は、来年秋に東京で行われます。今回課題を共有した皆様と、また東京の地でお会いできることを大変楽しみにしております。最後に、改めまして、今回の開催にご尽力頂きました、ザッパ会長を始めとするイタリア側の皆様、そして、IJBG の趣旨にご賛同頂き日本からご参加くださった多くの皆様、ここにお集まりの全ての皆様に、感謝しきれぬほどのお礼を申し上げ、私の閉会の挨拶とさせて頂きます。それでは来年、また東京でお会いしましょう！

後日検討の結果、当初予定を変更し、京都開催に決定。